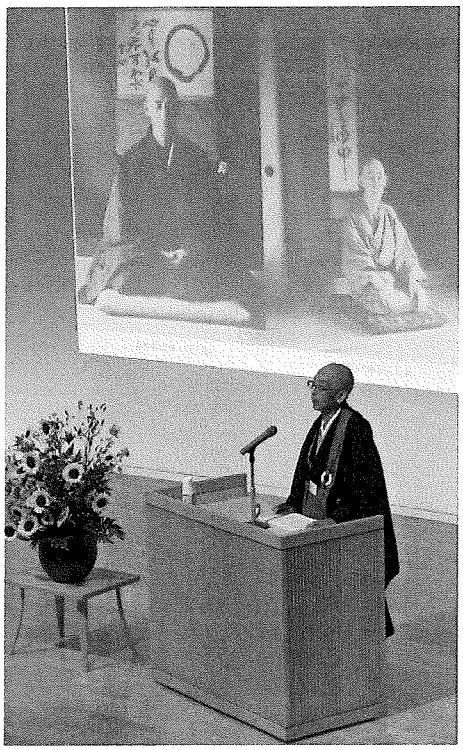
西田哲学会会報

第十二号

題字　上田閑照

発行・西田哲学会事務局
〒九二九―一一二六
石川県かほく市内日角井一番地
石川県西田幾多郎記念哲学館内
電話（〇七六）二八三―六六〇〇

西田哲学会第十二回年次大会概要



西田哲学会第十二回年次大会が、平成二六年七月十九日（土）、二十日（日）二十一日（月祝）の三日間にわたり、石川県かほく市にある西田幾多郎記念哲学館において開催された。

初日（十九日）の午前の部では、外国語セッションと、『善の研究』講読（入門講座）が行われた。外国語セッションでは、林永強氏（東京大学）の司会のもと、アダム・ローナン氏（神戸大学）、ローラ・スペッカー・サリバン氏（京都大学）、朝倉友海氏（北海道教育大学）が発表した。『善の研究』講読のほうは、白井雅人氏（東洋大学）と中嶋優太氏（京都大学）が担当し、同書の第二篇第一章と第二章を講読した。

同日午後の部では、岡田勝明氏（姫路獨協大学）の司会のもと、田中久文氏（日本女子大学）による講演「日本思想史における西田哲学の意義 ―高橋・西田・田辺―」と、北野大雲氏（長岡禅塾）による講演「轉轆轤地 ―禅と西田先生―」が行われた。

田中氏は、同時代の哲学者である田辺元と高橋里美、西田の三者を取り上げ、三者の相互批判のなかで西田哲学を捉え返した。（司会の岡田氏のコメントを借りれば）西田・田辺関係に、さらに高橋を加えることで、三者の連関が「立体的」に論じられた。さらに田中氏は、三者の哲学と鎌倉新仏教との関係を探り、三者の哲学は各々の立場から、鎌倉新仏教を継承し展開させたものであることを論じた。

北野氏は、西田や鈴木大拙、森本省念（西田の弟子）の生涯や参禅経験、様々なエピソード等にも言及しつつ、スライドも示しながら、西田の『善の研究』、および最晩年の論文「場所的論理と宗教的世界観」の言葉や、『無門関』、『碧巌録』、『臨済録』等の禅書の言葉を解説し、蘇東坡の漢詩も味読し、それらと西田哲学との連関を論じた。法衣を纏った北野氏が醸し出す雰囲気も印象に残る講演であった。

二日目（二十日）の午前の部では研究発表が行われたが、今年度大会では、初めて二つの部会が設けられた。

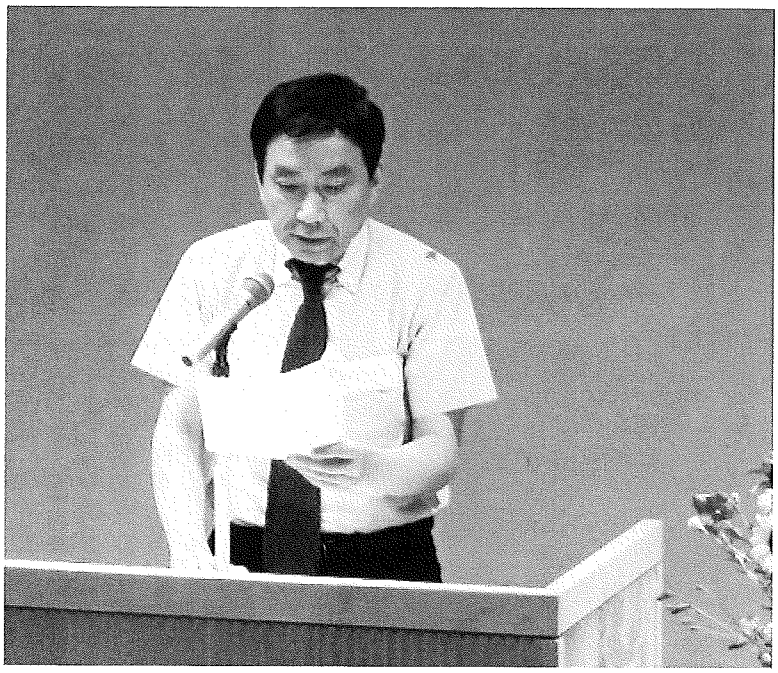
地下で開かれた部会では、石井砂母亜氏（ルーテル学院大学）と、竹花洋佑氏（大谷大学）、田口茂氏（北海道大学）、以上の三名の司会のもと、五名の研究発表が行われた。具体的には、森野雄介氏（大阪大学）による「『無の自覚的限定』における身体と衝動」、濱田覚氏（京都大学）による「西田とシェリングの認識＝存在論」、服部圭祐氏（大阪大学）による「『種の論理』と『間柄の倫理』の潜在的対立」、満原健氏（京都大学）による「純粋経験論はいかなる点で心理主義的か？」、丹木博一氏（上智大学）による「『表現』の否定的構造について―『絶対矛盾的自己同一』における現象学的真理論」、以上五つの発表である。

森野氏は、西田の著作『無の自覚的限定』の中心概念である「永遠の今の自己限定」と「身体」の関係を解明したうえで、身体的衝動のもつ重要性に着目しつつ行為のプロセスを解明し、同書以前の前期哲学における衝動との連関、および同書以後の後期哲学における「行為的直観」の立場との連関を示した。

濱田氏は、カントの『判断力批判』を手掛かりとして、シェリングと西田の質料・形相関係の捉え方における共通点を探ると共に、その最終形態を解明し比較した。そしてシェリング哲学は「悪」の問題を、西田哲学は「死」の問題を正面から論じた哲学であったと特徴づけた。

服部氏は、田辺元の「種の論理」を、「絶対媒介」概念を中心に取り上げ、そこに「和辻倫理学」に対する潜在的批判を読み取ると共に、「個・全」の相互媒介を一中心とする和辻倫理学のうちに、「種の論理」に対する潜在的批判を見出した上で、両者の関係を現代的視点からいかに理解しうるか論じた。

満原氏は、フッサールの心理主義批判を概観した上で、西田の純粋経験論はフッサールの立場からすれば心理主義的であるが、それは西田が、フッサールのように事実真理とアプリオリな真理との差異を「橋渡し」できないものと見なさずに、むしろ積極的に「橋渡し」しようと



したためであると論じた。

丹木氏は、西田の後期の論文「絶対矛盾的自己同一」を取り上げ、「表現」概念の否定構造に着目することで、後期西田哲学の真理理解の特徴を明らかにした。そして西田の思索が、現象学的思惟を貫いたものであるのみならず、現象学運動の展開を先取りし、新たな方向を指し示したものであることを論じた。

四階で開かれた部会では、杉本耕一氏（愛媛大学）と上原麻有子氏（京都大学）の司会のもと、四名の研究発表が行われた。具体的には、喜多源典氏（関西大学）による「西田哲学における「他者」と「超越」」、名和達宣氏（親鸞仏教センター）による「西田哲学と親鸞教学―「逆対応」の可能性」、鋳物美佳氏（ボルドー第三大学）による「いかにして病と向き合うか、あるいは後期西田哲学にみるパトス的なものとの対峙」、ジャサント・トランブレイ氏（北海道大学）による「西田の彼自身の論理に関する散乱した言葉」、以上四つの発表である。

喜多氏は、「自他合一」や「神人合一」を主とする純粋経験では捉え尽くせない、「（絶対）他者性」や「超越性」が、中期の『無の自覚的限定』以降、色濃く現れて来ることに着目し、両概念をめぐる西田の思索の変遷を綿密に辿り直した上で、最晩年の宗教論を「不可逆性」という観点から捉え返した。

名和氏は、西田と同時代の宗教者（曽我量深等）との思想交流を辿り、西田の宗教論のうちに、同時代の親鸞教学が与えた影響を探ると共に、西田宗教論の核心である「逆対応」の概念を親鸞教学の立場から読解し、その可能性を論じた。親鸞の「悲歎」と西田の「悲哀」のうちに、両者共鳴するものも見出した。

鋳物氏は、西田の「行為的直観」概念や、私と汝と彼をめぐる思索、悪魔的なものと神的なものをめぐる思索など、後期西田哲学を新たに解釈することを通じて、病の恐怖との対峙方法を読み取り、その具体例を、堀辰雄が自分の体験に基づいて書いた、『風立ちぬ』の主人公に見出しうることを論じた。

トランブレイ氏は、西田哲学全体を特徴づける上で、「場所的論理」という表現を使用することの妥当性を、西田の用語を発展史的に辿ることはもちろん、数学のトポロジーからの影響や、物理学の「力の場」からの影響、レヴィンのトポロギー的心理学からの影響を解明することを通じて、多角的に検討した。

各発表後の質疑応答も活発かつ充実したものとなった。九名の発表者が、各々の関心から、これほどまでに多種多様な発表を成しえたのは、西田哲学のもつ豊かさと無限の可能性を示して余りあるものであったと言えよう。（文責　熊谷征一郎）

シンポジウム報告

松丸壽雄

それは暑い夏の日が照り付ける七月二十日の午後、場所は宇ノ気の西田幾多郎記念哲学館であった。「西田幾多郎と鈴木大拙」という大きなテーマを扱うシンポジウムが初めて西田哲学会で取り上げられたのだ。二人の考えを比較検討する書籍はすでにいくつかある。だが、両巨擘の思想が呼応する根本にまで届かんとする探求の試みがなされるのは、今後の学会の方向付けにも大きな意味を持つことになろう。

シンポジウムは、三人のパネリストがそれぞれの研究成果を報告し、それを基に、パネリスト間で共通の問題となる事柄を討議し、その後パネリストへの質問を受付けて、それに答える方式で聴衆をも巻き込む形で進行した。

最初に研究報告をしたのは、石川県西田幾多郎記念哲学館専門員の大熊玄氏であった。大熊氏は、禅学者ないし仏教学者として呼ばれることの多い鈴木大拙を敢て「哲学者」として捉え直す試みを展開した。それは、西田幾多郎の哲学者としての有り方との対比をも可能にする見地を今後開くためという隠れた意図もあった。ところで、その試みの根拠となるものは、大拙が「禅の悟り」は「禅体験」と「禅意識」とによって構成されているとしている点にある。その「禅意識」は分別（思惟）を含んでいる。これを考慮に入れれば、哲学がそもそも「思惟（分別）を本質」としていることに、親近性を見いだすことも可能であるからである。ただし、「禅意識」が所謂「哲学」と異なる点は、思惟（分別）を含みながらも、常にもとの禅体験、即ちあるがままの日常（無分別）へと帰って行く所にある。分別の無分別にして無分別の分別という性格を本質的に持っているのが「禅意識」である。しかし、所謂哲学には、この「無分別」という性格は欠落するのが通例である（ただし、西田哲学は例外的ではあるが）。分別を含む点では、禅意識は「禅の哲学」ではあるが、無分別に常に還帰し、かつ無分別から分別へと出る点にお

いては、それは「無哲学の哲学」と称することができる。かくして、これに携わる大拙は「無分別の分別」者、「無哲学の哲学」者と見なし得る。このような趣旨で発表をした。

次の報告者は京都産業大学教授の森哲郎氏であった。森氏は、西田と大拙とが共に求めた処を我々が今求めて行くことが大事であるという視点から探求の道を進める。その中で、西田における「純粋経験・自覚・場所」という前期の展開は、純粋経験の重層構造「思惟・意志・直観」の根柢への帰り行きに対応することを見据える。これに呼応する大拙の思想は「禅経験・禅意識・禅思想」の三層構造にあたるとして、両巨擘の思想の「共鳴、共振」を読み取ろうとする。上述の事柄を背景としながら、今回は特に大拙に焦点を当てて、「即非の論理」を採り上げた。

「即非の論理」とは「仏説般若波羅蜜、即非般若波羅蜜、是名般若波羅蜜」に基づいて命名されたとする。これを定式化すると「AはAだと云うのは、AはAでない、故に、AはAである」となる。「これが般若系思想の根幹をなしている論理で、また禅の論理である、また日本的霊性の論理である」と大拙はいう。この即非の論理は、あくまでも「霊性的直覚」の「禅経験」を根柢にしており、分別の無分別（否定）と無分別の分別（肯定）との瞬間的事実経験として現成するものであり、禅経験にとって不可欠の、行為に結びついた論理である。西田の「矛盾的自己同一」に対応する「即非の論理」は、大拙の場合、「禅経験はどうしても禅意識にならねばならぬ」として、盤珪の不生を介して見れば、反省的な思想の抽象的論理ではなく、「霊性的自覚としての人」の「行為の論理」という性格を見落とすことはできない、とされた。

最後の報告者は、東洋大学学長の竹村牧男氏であった。竹村氏も西田と大拙の触れ合うところを探求した。ことに両者の浄土真宗観は両者の照応を現わす。まず真宗の教義に特徴的なことは、如来の至心・信楽・欲生なる「三心」が言葉は異なってもその意は一つとする三心即一心と親鸞によって捉えられる事態にある。この「真実の一心」はかならず名号を具していて、衆生は名字を如来のはからいに従って疑心無く称すれば、弥陀の本願力により、浄土に往生するとなっている。この西方浄土往生の教えを、大拙は、業苦的存在としての衆生が「そのままにして、弥陀の絶対的本願力のはたきに一切をまかせ」て「ここに弥陀なる絶対者と親鸞一人との関係を体認する」経験として捉え、それは「日本的霊性」において始めて可能であったと解する。これに対して、西田の真宗観は、「仏は我々の自己に何処までも超越的なると共に、而も之を包むものである。『念仏の申さるるも如来の御はからいなり』と云うに至りて極まる。此に親鸞の横超の意義があるのである。横超は名号不思議によらなければならない。」としている。即ち、絶対者と人間とのどこまでも逆対応的な関係は、この名号的表現による外ないと西田は捉えたのである。西田も大拙も真宗の絶対他力をよく把捉していると言える。次に、西田の自然法爾解釈と大拙の還相解釈の間にも、深い照応を見出すことができる。それは、西田が、超個の個を自覚した時は、現実世界での個として全体作用しなければならないと考えれば、それに応じて大拙は「極楽というところは久しくとどまるべきところではない。…極楽を見たらただちに戻ってこなければならない。還相の世界へはいらにゃならん。」と還相重視の解釈をする。要するに、「我々の自己が自己自身の根柢に徹して絶対者に帰すると云うことは、…却って歴史的現実の底に徹することである。絶対現在の自己限定として何処までも歴史的個となることである」という西田の言葉に、大拙と西田に共通の根柢を見ることができるとする主旨であった。

この後、報告者間の議論が展開された。まず、司会者が、「無哲学の哲学」「即非の論理」「自然法爾」ないし「還相」というキーワードから、それらに通底している「行」ないしは「行為」の意味を掘り下げるとどうなるか、という問いを提出した。これに応じて、最初に森氏から全体の背景として、西田が親鸞論あるいは真宗観を展開する背景には、田邊元の真宗観への批判があった点、大拙が哲学者は慈悲を持つべきだという点、更には禅がつぶれて念仏となるという大拙の見解などが挙げられた。これらを考慮しながら、各報告者の間でとりわけ印象深い考察がなされた。即ち、無功用の行と即非の論理はどのような繋がりを持つかについて考えるには「応無所住、而生其心」がどのように位置づけられるかにかかっている。その際、即非と

外国語セッション報告

林　永強

西田哲学会第十二回年次大会は二〇一四年七月十九～二十一日にわたって開催された。初日の十九日（土曜日）の朝には外国語セッションを行い、西田哲学や日本哲学について英語で大いに議論した。今回はAdam Loughnane氏（神戸大学）、Laura Specker Sullivan氏（京都大学）、朝倉友海氏（北海道教育大学）による三つの発表があった。

Loughnane氏のテーマは Nishida and Merleau-Ponty: Inter-Expression as "Motor-Perceptual Faith" であり、そういった〝faith〟は超越的なもの、また神に対する〝faith〟ではない。faithという概念は西田とメルロー＝ポンティがそれぞれの初期の芸術的な表現（artistic expression）にあり、移動的（moving）かつ知覚的な身体（perceiving body）である、という。そのような信仰の実践であり、〝motor-perceptual faith〟（移動的－知覚的な信仰）とLoughnane氏が主張する。

Sullivan氏は〝Nishida Kitarō's Ethical Standpoint: Indications from the Concept of *Kōiteki Chokkan*〟を題した論文において、西田の行為的直観から倫理学を考え直したいという趣旨である。今までの倫理学は、とりわけ規範倫理により、倫理的な決定を引き出す。それに対して、決定を左右するのは理性ではなく、直観であるとSullivan氏は指摘する。西田の倫理学は決して抽象的ではなく、人格的（personal）である。それは理性、または抽象的な論理を求め、倫理学を樹立する立場と異なるとSullivan氏は強調する。

朝倉友海氏は〝The *Onto-topological* Constitution of Metaphysics: Nishida Kitarō and Mou Zongsan〟という題目で発表した。形而上学において、西田の場所の論理における矛盾的自己統一は牟宗三の円教（complete teaching）によって再考すべきであり、牟の仏教的存在論（Buddhist ontology）は西田の場所の論理によってより哲学的に解釈できる。そのような相互的な交錯を通じて、東アジア哲学におけるonto-topological constitution of metaphysics（存在―場所的形而上学の形成）であると朝倉氏が提唱する。

以上、三つの発表を簡単に纏めたが、詳細はそれぞれの論文を参考されたい。一方、周知のように、二〇〇八年から始まった外国語セッションにより、英語で西田幾多郎をはじめとする日本哲学を発信し続けながら、日本語での日本哲学への影響もあると言ってもよい。今回の発表からみてもわかるように、恐らく今まで日本語での研究と全く違って新しいテーマや方法で日本哲学を読み直し、さらに開拓しようとする。外国語セッションは決して日本語以外での発表の場を設けようとする目的のみならず、言葉に限らず日本哲学を議論しておきたい。

無論、外国語セッションは言葉を越えて哲学するという意味ではなく、多言語を通じてより広く、深く探究することである。西田幾多郎自身も国語の「自在性」と強調しながらも、「言語の純粋性」を明確に反対している（「国語の自在性」新版『西田幾多郎全集』第七巻、岩波書店、二〇〇三年、三三四頁）。言葉は「生きたもの」であり、「外国語の語法でも日本化することができるかも知れない」（同上）と西田が述べている。「日本化」というのは、外国語を排除して国語の「特色」（同上、三三三頁）を高揚するのではない。俳句を一例としては、「漢語を取り入れた」（同上、三三四頁）と西田が指摘しているように、「言語の純粋性」を反する一方、外国語を積極的に「取り入れ」、国語の「自在性」はさらに発揮できると考えられる。そのような「言語論」により、多言語を交錯しながら、国語の「自在性」のみならず、俳句のように哲学は超個の個と個との包被の関係を意味する。これらが弥陀の名号を称えることにより一体化する。この連関から、名字称号は逆対応として西田では捉えられたとされた。また「慈悲」に関しては、仏の本願から盤珪の不生禅が出て来て、そこには真宗的な考えが含まれていた点などが示された。さらには、大拙の禅経験・禅意識・禅思想に対応する点が真宗にも見られ、それが聴聞である。また至心に廻向する者が弥陀であり、三心即一心として弥陀が主体となるところから派生する形で、言葉の問題も考えられるので、真宗にも大拙の禅経験、禅意識とに対応するものがあることも次第に明らかになった。

さらには、聴衆からの質問に答える形で、発表内容を更に深める見解が各報告者から展開され、パネリストおよび聴衆にとって誠に有意義な形でシンポジウムを終えることができた。

することもできるのではないか。つまり、外国語セッションは「国語」以外のセッションだけではなく、「国語」以内に「取り入れ」ることも言えるだろう。そうであるならば、外国語セッションは、外から内へ、内から外へという相互的、建設的な哲学的議論の場であると理解できる。また、日本哲学そのものも、「言語の純粋性」によって形成されたものではなく、様々な言語を「取り入れ」たものであるとも言えるのではないか。そこから日本哲学のポテンシャルは看過できず、より掘り下げるべきある。

問題は、「取り入れ」たものとしての日本哲学において、どのように（再）発見するのか。西田が述べたように、外国語の「消化如何にある」（同上）のか。それは言語論に限らず、方法論の問題でもある。外国語セッションの報告としては、西田哲学及び日本哲学の方法論を論じるものではない。だが、西田の「取り入れ」という見方は、今後の外国語セッション、西田哲学、日本哲学、また哲学そのものにおいても深い意味を見出せると私は考える。

まずは「取り入れ」というのは、（言語の）「純粋性」に対する意味である。外国語セッション、西田哲学、日本哲学、また哲学そのものであれ、何らかの「純粋性」を求めることではない。今回の外国語セッションからみると、すべて英語で発表したが、国籍、文化などの「純粋性」に基づいて行ったことではない。発表の内容からみても、「純粋性」を目指して議論したものではない。多文化や多角度を開放的に「取り入れ」、西田哲学、日本哲学、また哲学そのものを論じ、さらなるポテンシャルを開けるのではないか。

次に、そのような多様性により、とりわけ西田哲学や日本哲学に対しては、一層ポテンシャルが見えながら、その「独自性」も確認できるだろう。「独自性」というのは、「純粋性」、また「本質」と異なり、様々な言語、文化、哲学的要素などを「取り入れた」ものである。それは静的な存在ではなく、動的な「取り入れ」る哲学的運動（activities or philosophizing）である。そこには閉鎖的、自文化中心的な「独自性」を結晶しようとするのではなく、あくまで開放的、多文化的な哲学的交錯である。そのような「独自性」があれば、日本哲学の「専門性」もあると過言ではない。近年、日本哲学に関する発展も、そのような「専門性」をより高めようとする傾向がある。例えば、一三六〇頁に至る膨大な日本哲学資料集、*Japanese philosophy: a sourcebook* (James W. Heisig, Thomas P. Kasulis 及び John C. Maraldo 編、University of Hawai'i Press, 二〇一一）や世界初査読付きの英語での日本哲学の専門誌、*The Journal of Japanese Philosophy*（編集長は上原麻有子、State University of New York Press にて二〇一三年創刊）などがあり、西洋哲学、インド哲学、中国哲学のように一つの専門分野として構築しようとする。

さらに、「専門性」を高めることにより、「国際化」も同時に加速している。多言語の学会や出版物が益々増え、日本哲学の研究は世界中に広がりつつある。西田哲学会も今後外国語セッションを維持する一方、ウェブサイトを多言語化する企画も立っている。「取り入れ」というのは、言語のみならず、「専門化」や「国際化」への推進も関連しているだろう。

西田幾多郎記念哲学館を訪問し、西田哲学会大会に参加して

ジョン・C・マラルド
（ノースフロリダ大学哲学部名誉教授）

夢のようなことが現実となった。今回の西田幾多郎記念哲学館への訪問と、西田哲学会年次大会と国際交流シンポジウムへの参加はそう言い表すことができる。何年もの間、私は哲学館のウェブサイトに掲げられている写真を見たり、西田哲学会の年次大会の良さついて友人から話を聞いたりしていた。しかし、今年の私の経験は、そのようにして蓄積されていた私のあらゆる期待を超えるものであった。実際、私が今回得た豊かな経験は、これまでに私が〝夢みたり〟想像したりしてきたりしたことを凌駕するものであった。

西田幾多郎記念哲学館は、一人の哲学者に献呈された世界的に見ても稀な博物館であり、そして、規模も内容も最も充実したものであることは間違いない。安藤忠雄氏の建築は自分で体験しなければわかるものではない。写真のような二次元の媒体では、この建物に近づき、内部の通路や部屋を歩く際に感じる、堅固感、量感、館を取り巻く空間の印象などを表現するには十分ではないのである。いくつかの点において、この建築物は西田哲学を彷彿させるものである。建物は、アクロポリスのようであり、その場所を限定している周りの環境からそびえ立ってある。それは西田が書いた何巻ものことばのように壮大で、また、京都帝国大学の若い学生に対して西田先生が残したといわれる印象のように、力強く重厚である。長く、コンクリートで作られた通路は、西田が自身の場所の哲学を探求していった小径を象徴化しているように見える。廊下とそれに繋がっている部屋にある、静かで、何もない空間は、西田哲学の基礎となっている絶対無、すなわち差別性を越えること、を反映しているようだ。それぞれの部屋と空間との境界は、実用的な機能からというよりはむしろ、空間的な量をもって決まっていく原則となっているように思われた。そして、この建物の普通とは違った独特の設計は、西田の思索の思いがけない転回を反映していると言うべきかもしれない。

西田の写真や揮毫、そして彼の初版本が展示された展示室をめぐりながら、私は、まるで西田の人生や彼の時代へと自分が入り込んでしまったかのように感じた。一九四〇年、西田が七〇歳の時に西田と山本良吉との間で交わされた会話の録音音声の展示には、特に驚かされた。会話の主題は個人主義と全体主義との関係についてであった。

＜ジョン・C・マラルド氏原文＞

My Visit to the Nishida Kitarō Museum of Philosophy and Participation in the Nishida Philosophy Association Conference

John C. Maraldo
(Professor of philosophy emeritus, University of North Florida)

Like a dream come true – this describes my visit to the Nishida Kitarō Museum of Philosophy and participation in this year's Nishida Philosophy Association conference and international symposium. For several years I had seen website photos of the Museum and heard good things from friends about the annual conferences. But my experience this year exceeded all expectations. Indeed, what I had previously "dreamed of " or imagined did not come close to the rich experiences I had.

The 西田幾多郎記念哲学館 is one of the very few museums in the world dedicated to a single philosopher, and certainly it is the largest and richest in content. Ando Tadao's architecture must be experienced in person; two-dimensional photographs cannot adequately represent the solidity, volume and encompassing spaces one experiences when one approaches the building and walks inside its corridors and rooms. In some ways, the architecture may be likened to Nishida's philosophical work. The building is a kind of acropolis, towering above the environing land that defines its place. It is massive, like the volumes of words that Nishida wrote, and it is imposing, as was the impression that Nishida Sensei was said to make on his young students at Kyoto Imperial University. The long, concrete hallways seem to symbolize the pathways Nishida explored to develop his philosophy of place, and the quiet, empty spaces in corridors and connecting rooms seem to reflect the ultimate nothingness, beyond differentiations, that underlies this philosophy. Spatial volume, rather than pragmatic function, seems to be the principle defining the demarcations between the various rooms and spaces, and the building's unusual layout might be said to reflect the unanticipated turns in Nishida's thinking.

Wandering through the display rooms that feature photographs of Nishida, his calligraphy, and first editions of some of his writings, I felt transported to the milieu of his life and times. A particular surprise for me was a sound recording of part of a conversation between Nishida and Yamamoto Ryōkichi in 1940, when Nishida was seventy years old. The topic was the connection between individualism and totalitarianism, which, Nishida emphasized, must be thought together. I had never really tried to imagine what Nishida sensei sounded like, but I was astonished at the energy and conviction he conveyed in his high-pitched voice in this recording. It was also a special treat to stand inside the rebuilt room— the separate little building at the edge of the Museum—that was Nishida's study in his Kyoto home, to touch the desk at which he sat and see some of the books he prized, such as a volume on Saint Anselm and "Little Flowers: The Life of St. Francis and the Mirror of Perfection."

The most important feature of the Museum, I think, is that its magnificent auditorium and facilities provide a place for large-scale, international meetings and for research devoted to Nishida's work. The conference this year was another source of unexpected richness for me. I had of course read issues of the 西田哲学会会報 and knew something of conference proceedings, but I was especially delighted at the number and quality of sessions and papers, including a morning of excellent presentations in English. When one thinks of how rare it is, relatively speaking, that Nishida' s thought is discussed in philosophy departments in Japan or in Europe or the Americas, it is gratifying to see that interest in his thought is so alive and well, and has inspired so many investigations. I particularly appreciated the active discussions after the formal presentations, and the frequent informal conversations between sessions and at the reception dinner.

This year's special theme of Nishida Kitarō and Suzuki Daisetsu connected me to my very first acquaintance with Japanese culture. As a graduate student of German philosophy in Munich, Germany, in the late 1960s, I read some books by D.T. Suzuki and came of know a bit about Zen and Japanese thought for the first time. Soon afterwards I came across an English translation of Nishida's 善の研究 with an introduction by D.T. Suzuki. With its straightforward connection between concrete experience and abstract thought, Nishida's work captivated my attention, and I vowed to go live and study in Japan. My gradual understanding of the depth of Nishida's philosophy, of Zen and other forms of Buddhism, and of Japanese thought in general was greatly enhanced this year by listening to the rich and nuanced conference presentations on Nishida and Suzuki.「世界哲学」(Welt-Philosophie), the theme of the international symposium in which I was invited to participate this year, resonated with my hope that philosophers from all over the globe continue to come to this site and then take back to the wider world their critical reflections on "Nishida philosophy."

After the conference and symposium, a group of participants visited the 鈴木大拙館 with its contrasting architecture of pools of water, earthy gardens, and "borrowed scenery" 借景, reminiscent perhaps of the differences of style in Suzuki's and Nishida's thinking. The next day I was able to visit the Nishida family gravesite in Unoke, the site of his childhood home, and the 小学校 with Nishida's calligraphy of MU engraved on its facade and carved on a huge red rock that sits beside the school building. Finally came a drive up the Noto peninsula to Ushitsu, the home village and memorial museum of Nishida's student Nishitani Keiji, whom I was privileged to know personally. This concluded an experience I shall never forget and for which I am ever grateful.

西田が強調しているように、このふたつは一緒に考えなければならない事柄である。西田先生の肉声がどのようなものであったか、私は想像しようとしたこともなかったが、この録音の、かん高い声が伝えてくる力強さと信念には驚かされた。博物館の端には、本館とは別に小さな建物がある。それは、京都の自宅にあった西田の書斎を移築したものであるが、その中に入れてもらい、西田の机に触れ、西田が珍重した本を目にするという特別なはからいも頂戴した。それらの本の中には、聖アンセルムスの作品や、『小さい花：聖フランチェスコの生涯と完全の鏡』もあった。

この博物館の最も重要な特徴と私が考えるのは、とびきり上等な大講堂とその設備によって、大規模な国際学会や西田研究のための場所が提供されていることである。今年の年次大会には、私にとって、別の予期しなかった豊かさがあった。もちろん私は西田哲学会会報を読んでおり、年次大会の進行についても知っていた。それにしても、英語で行われた素晴らしい朝の諸発表も含め、セッションと発表のその量と質には特に感激した。西田の思想が、日本の、あるいはヨーロッパやアメリカの大学の哲学科で議論されることが比較的めずらしいことであることを思うにつけ、西田の哲学についての関心がいまだに高く、多くの研究を喚起せしめていることを見ることは喜ばしいことである。公式な発表に続く活発な質疑応答や、セッションとセッションとの間や歓迎晩餐会の時にしばしば起る非公式な対話などを、とりわけ私は楽しませてもらった。

今年度の年次大会テーマである「西田幾多郎と鈴木大拙」は、私と日本文化とのごく初期の出会いへと私を誘う。一九六〇年代後半に、ドイツのミュンヘン大学でドイツ哲学の大学院生だった時、私は鈴木大拙の数冊の本を読んだ。それが、私が禅と日本思想について知り始めた最初のことであった。そのすぐ後に、私は、大拙が序文を書いている西田の『善の研究』の英訳版に出会った。具体的な経験と抽象的な観念とを直に接合させるという、西田の作品は私の関心を捉えた。私は日本に行って、研究しようと心に誓った。私がこれまで徐々に蓄えてきた、西田哲学、禅とその他の形態の仏教、そして日本思想一般の深さについての私の理解は、今年の西田と大拙に関する内容深く精密な発表を聞くことで大いに高められた。今年私が招かれ、参加したシンポジウムのテーマである「世界-哲学」Welt-Philosophieは、地球上のあらゆるところからの哲学者たちがこの場所に集い続け、そして「西田哲学」についての批評や考察を全世界へと持ち帰って欲しいという、私の願いと共鳴するものである。

年次大会とシンポジウムの後、参加者の一団で鈴木大拙館を訪問した。大拙館は水を張った池と自然な庭園と借景を取り入れていることが対照的な建築で、大拙と西田の思想の様式の違いを連想させた。翌日、私は宇ノ気にある西田家の墓地と、西田が幼少期を過ごした家のあった場所と、西田の字で「無」と刻まれた小学校とを訪れることができた。無の字は校舎の壁面と、その脇にある大きな赤い石に刻まれてあった。最後に能登半島を上って宇出津まで行き、西田の弟子であり、私が個人的に知己となる光栄を得た西谷啓治先生の生まれ故郷と彼の記念館を訪れた。こうして、これからも決して忘れることのない、感謝の気持ちも絶えることのない経験を終えた。

（訳　ブレット・デービス、水野友晴）

理事会報告

西田哲学会第十二回の年次大会にあわせて、二〇一四年七月十九日（土）十二時四十五分より石川県西田幾多郎記念哲学館にて理事会が開催された。出席者は十七名。議題、報告事項は右のとおり。

（1）第十三回年次大会について

第十三回年次大会は、二〇一五年七月二十五日（土）～二十六日（日）に京都で開催することが決定された。また、大会プログラムの概要については幹事会が立案し、秋の理事会（京都にて開催）にて承認決定する方針が承認された。

（2）二〇一三年度会計報告

会計報告ならびに会計監査報告が提示され、承認された。

（3）二〇一四年度会計予算

予算案が提示され、承認された。

（4）入会・退会・種別変更・除籍について

入会希望者と退会希望者の一覧が示され、出席理事による点検を経て、入会と退会のすべてが承認された。また、除籍候補者の一覧が示され、該当者の除籍が承認された。

（5）編集委員会報告

編集委員会から、年報第十一号の刊行および送付が報告された。

（6）ホームページについて

広報担当幹事から説明が行われた上で、左に掲げる①～⑥の事項が承認された。

①ホームページの機能拡充のため、レンタルサーバーの契約を変更する。

②現行のレンタルサーバー会社との契約は終了する。

③現行ドメインを新レンタルサーバー会社に移管させる。不可能なら新しいドメインを取得する。

④ホームページにCMSシステムを導入する。

⑤外国語サイトを新設する。

⑥運用の詳細は広報担当幹事と事務局に委ね、理事会に適宜報告する。場合によっては、事後的に理事会に諮ることを条件に、会長が幹事会と相談の上で決断することもあり得る。

（7）その他

「パリ日本哲学研究会」についての報告が、斎藤多香子氏によって、総会および懇親会において行われることが確認された。また、公益財団法人日独文化研究所からの、ホームページ相互リンクの申請が承認された。

（水野友晴）

「西田哲学研究基金」について

昨二〇一三年度、第八回の西田哲学研究基金公募には、二名の応募がありました。また「翻訳出版」助成の応募も含まれて

いました。「翻訳」はそれ自体は「研究」と性質を異にしますが、外国語で西田哲学を研究する人に裨益するところが極めて大きく、かつ訳者がテキストに付す解説等も同様の意味があるので、基金運営委員会としては翻訳助成を肯定的に捉えています。その場合、助成金は出版社に渡されます。厳正な審査をおこなった結果、研究助成応募者に関しては、今後の研究進捗状況を見ることにして、今年度の助成認可は見送りました。その結果、下記の一名に助成金交付が決まりました。

エンリコ・フォンガロ氏
翻訳・研究テーマ「西田幾多郎、『哲学の基礎問題』、「信濃哲学会のための講演」より」
助成金額三〇万円。

なお昨年度に助成を既に決定していた出版助成に関しまして、待っていた契約書が出版社より届き、条件が整ったことに基づき、以下の翻訳・研究に対して、助成金の支払いを執行しました。

ジャサント・トランブレー氏
翻訳・研究テーマ「西田幾多郎全集第4巻『働くものから見るものへ』のフランス語翻訳と分析」
助成金額三〇万円。

今年二〇一四年度の交付基金を公募します。一件につき三〇万円から五〇万円で、数件の採択を予定しています。過去に不採択となった場合でも、内容を整えて再申請することは可能です。また、応募数は特に制限は設けていません。応募要領は次の通りです。

（i）提出書類
①履歴書、②研究計画、③翻訳出版の場合は出版社との契約書。

（ii）提出先
①〒六〇六―八五〇一
京都市左京区吉田本町
京都大学文学研究科
氣多雅子研究室。

（iii）締め切り
二〇一五年四月四日（土）必着。

（iv）備考
①ほぼ二年以内という目処で、研究成果報告を提出していただきます。②翻訳出版の場合は、訳稿完成を前提に出版社との契約がなされることが通常なので、ほぼ一年以内に出版図書の見本を提出していただきます。助成金交付の際には、出版書籍に本西田研究基金からの助成を受けた旨を印刷記載してください。また出版図書二冊を本基金に寄贈して頂きます。③研究成果の提出は、刊行物のコピー、抜き刷り、あるいは四千字程度の報告文書のいずれか、とします。提出先は、上記の氣多研究室です。

（文責　西田哲学研究基金運営委員会二〇一四年度代表・松丸壽雄）

西田哲学研究会のご案内

・西田哲学研究会［於京都］
西田哲学研究会では、オープン参加のもと、ほぼ三ヶ月に一回のペースで西田の著作を読みながら討論を行なっています。『善の研究』を十回かけて読み終え、続いて『自覚に於ける直観と反省』の主要箇所を数回取り上げました。現在は、『芸術と道徳』の論文を抜粋して読んでいるところです。おそらく次回から『働くものから見るものへ』に入ります。連絡先は左記です。

幹事：秋富克哉（akitomi@kitac.jp）

案内は、基本的にメールで行ないますので、参加ご希望の方は、このアドレスまでふるってご連絡下さい。お問い合わせ等もお待ちしております。

（文責　秋富克哉）

・西田哲学研究会［於東京］
毎月一回、読書会を開催しています。原則として第三土曜日の午後三時から六時までですが、都合で日程が変更になることがありますので、関心のある方は左記の事務局までご連絡ください。次回の開催日時、開催場所、テキストをお知らせいたします。また、当研究会では毎年、研究会誌『場所』を発行しています。

〒一一〇―〇〇一五
東京都台東区
東上野三―五―九―四階
㈱フロンティア・クリエイション内　西田哲学研究会事務局
nishidaphi@gmail.com

『西田哲学会年報』掲載論文の公募について

『年報』巻末の応募要領にしたがってご投稿ください。たくさんの応募をお待ちしております。なお次の第十二号掲載分は、編集の都合上、平成二十六（二〇一四）年十二月末をもって一つの区切りといたしますのでご了承ください。

「年次大会」における口頭発表の応募について

第十三回年次大会（平成二十七年七月開催）の口頭発表者を公募します。発表希望者は、来年三月末までに、八〇〇字程度の要旨と簡単な経歴・業績表を添えて事務局にお申し込みください。

編集後記

かくも慌ただしい世の中になったのはいつからでしょうか。象牙の塔などと揶揄されて、俗世とは別の時間が流れるはずであった大学でさえ、何やら落着きない風体です。スーパーグローバル（！）大学、クォーター制導入、大学運営改革などなど、華やかな看板だけは結構なことですが、はたしてどこまで内実が伴うか。あちこちで溜息ばかりが聞こえます。いまや哲学といえども、（あるいは哲学だからこそ）世界の趨勢に向きあわざるをえないのかもしれません。この点でも西田の呟きから学ぶことがありそうです。

（編集委員長　小林信之）